

類題士朗

句集

下

913

イ

1-2





愛知  
県  
有  
物  
品

類題  
古  
明  
集  
巻  
之  
下

秋之部

五秋

あらしや秋立竹はゆき雀

秋立や蓮は葉買は池ゆき

稲生

雪はあふれて秋馬をふりや

秋とくはは物もや葉の音

まもあきまてあき乃秋

より秋は目よりみき湖のま

A910  
1  
1-2

初秋

もう秋の川流しきき小まらぬ

神降の麻つききり蓬う車

うきあがり方を初秋ゆらつかり

蛭紋よせりきこ暇くまを

あつらひ猿鳴り方まらか

しげなくまら

今朝秋

茨くまらりも死んでるれ秋

一葉

店乃戸へ捨い入きり相一葉

燈籠

灯籠の油わらり板う那

七夕

古里れ子よ子あがりり星まつて

大勝や板川をりり星乃妻

かも川やきりやうぼる星の夕

兄背りきあきりやけり糸

天の川

まの川乳のまらみさふ市州

七程のむらぬふかき天の川

阿きの川流しきほやまらり

おききり言れ中よりまら川

舟行

盆月  
堯象  
角力  
露

一棹子この舟ふね入いるよよの川  
水みづああのよよ鳥とりちちりりああままの川  
夕ゆふ草くさ子こむむくく暮くれすす盆ぼん月げつ  
青あおきき葉は折をちちけけるるをを堯えい象しやう  
薪きんの根ね乃の小こ家け子この風ふう角かく力りき  
世よつつりりるる人ひとのこころやや並ならばばお  
都みやこ貢こうるる百ひゃくの贈徐じゆ英えい  
よよふふ天あまりり才さいここううけけささぬぬ秋あきははあ  
居いるる寺てらはは白しろ衣えのなかか小こ夜よは

素す分ぶん法ぽう少せうのむらりの世海うみはは月げつ  
そそとと子このゆきととくくみみのいのつる  
人ひとの舟波なみれれまま何なに法ぽう師し  
岸きしの紀風ふうなり

白露しろくのこころりりああつつるるのみままひひは  
檀たん溪けい

家いへの音ありり誰たれ住すままとと暮くれるる烟えん  
山やま乃のやや松まつ子この枝乃の松まつ乃の松まつ  
得とく車くるま一字

霧

船を動かすの国をよくとる車一々車  
出らり乃ふとるのたしき霧の海  
秋きりや秋れをちつく物に多  
深折子一歩をききまら明ら  
いる妻や秋ふとるきとるの夢  
山と居とは心かろふとる海の上

稲妻

舟うとる

稲妻ふ瓜つくは流ははくきき

新風  
あき風や舟うとるへり物

秋風千抄也桶形に月夜に  
須磨寺とてを閑より秋風  
秋風にあきそくくさるの月  
月をさる言や水の上は秋風  
秋風や風を草木乃者なる  
あき風の吹吹き風の能く事  
山ひあやつとるく秋風

悼松兄

まつまきとるくを秋風

中よりしをきしきり此ね見ハ  
オノ子もつふ子けをいし  
年の能もいしをりく老と捨て  
先をりしきわしひうらふ  
それ多けきハ何うそや

木槿  
朝負  
新風やリ空をかきねれ鶴  
むしもやをちき木槿は花一  
ゆや〜も葉のさく垣新  
朝さ〜雪釣鳥を〜新か〜

い〜社の世を朝負の夢乃枝  
帳屋こ〜朝負の白の旅寐が  
朝負う〜そよ人の訪ふ度よ  
ま〜さやを朝負の花一  
あさ〜海やりの小車は花の上  
お智れた〜日の味〜さよ葉の夢  
残りなく咲ら〜は女部花  
そを〜〜都もれ名ぬ名〜  
やぎ〜〜君素よ古人此白いハ

女部花  
蘭

菘

菘は冬をきく浮世のこころをかへるものなり  
冬菘やまゝの持ちたる縄をよこ  
のそくまて物々々菘のゆゑが  
よき、福よよとくくまき、水は度が  
一勺井

とまねとてちりもなかり菘芒  
菘は冬をきくものなる西のり  
野秀亭菘見

菘の雨ありは兼て菘の雪あり

菘

即ち雨や門のしりまて菘のむ  
小傍居て

菘は冬や塘を雨の大りき  
山里やおとも 叩き 菘の門  
菘は冬はハリ焼きけあふ西の岸  
人多やあふさばぬけら菘乃原  
菘芒、唐の袖タラケし  
缸の船や雪りき乃菘の多  
こゝろとては老ゆるとのよ菘は冬

秋蝶

蝶のてし回し木陰を鳴りて

鈴虫

鈴むし——の小地や小町、髪は落

蒼

きむしを宿やいつまき瓜の花

鳴る木のあしを鳴りきりて

かな悲し鳴る秋露——蒼

死後の枕上をむし——せんと

いのちり木影、墓所を

訪ふ

虫

握りてきて虫を知らず塚の草

庭雅ハ庭甫、や子つむしと

なくさし人と蒼虫をりふらつ

振りまきり、不庭よそてたれハ

わく、鳴る虫

虫はあつねもをりて虫れ鳴る色切

むし管やあり戸の向うつ、可乃礼

真紙子おまう、掃りていともな

八月や海りね夜もつづく——き

八朔

竹馬や地ハ八朔水里 蒼

竈馬



頭朝の月

ありてつき、月夜と此の烟が  
二月 不破までらるる日のくれし二月月

妹 跡

萩太やとこもありし二月月  
三月 三月月や小き此宮の妻あけ友  
三月 三月月よりき何その名残か  
初月夜 山里やりしあはれおも月夜  
五日月

よあそふの萩よめきや初月夜

五桂 五

初月よりまて 後をねけり  
言月 美代や山のうへよりさかの月

三月月おのくまてなりぬる月

帯梅亭

盃とあけく山月夜をみ  
昔と後しつら園を思ふ  
おのしとねるの友とらこけ

あまひかりも色うらをてけりふ  
かりう色はと音れ風流  
海山のけしき盡しそ  
主人に雅情平たよむ  
何れ

花をと栞て糸をうら乃月

名月とつふさをき月夜が

良夜(信光)

名月よ高の遠色も毛か

月見 月見とつり八浅もあ小橋が

贈伯光四十賀

子代折坂路乃わとちりて

若も花も月此ひうら

こに

月秋 昔一ろ年よ人よ月秋

中秋が一夕望月とてそ

くく十五夜を雨つて

降風木をおもをゆき

うきてさきと揚衣

中秋

降 雨を宗へめくくし月を月

白の目信懐より人とさうて

映持をるまをうぬくあ乃月

月をむくあくくも為新芒

甚自寺

兩月

雨くや月もあをり管水宮

降くく寸月や巧信され毒う底

くくあて月も物小庭下

須磨り

ひちひちむれ降おくれ

あやきやあやえくく

海人の家く神もく後月の雨

あくくゆんくく

降くくれ物も月れ名妙

明名

月くくくく一降ゆ島

山家く言くく月れくく

昔はつとほくやも  
言わて此夜は終麻の神  
ちくくまわつてつ  
侍もつとせやあつたか  
終るまをわつて

夜ありてもるねわつて  
巢燕は若土を思ひ  
乃まをふとつて  
やふ号して暖香や

あま蘭鳥の栖が空

曉うつとてつなり月夜つれ  
りぬつてつらつてつき月夜  
井の末の家も度れまの  
つらつてつらつてつらつて

松のつらつてつらつてつらつて

雨晴山月高

海山と流いあけつら月夜

牟他亭

夜もさうさう月の傳もさう蒼くれ  
享和壬戌七月既望 松尾の  
木犀屋よま言長法中より浪急の  
春徳ある東坡の赤壁を賦と  
きやくて歌をつらつ 侶魚暇の  
三言とて傳さう  
魚も水如心と月もあつる水は  
松岡よりをるさうさうさう月餅

とさうさうさう

子供およびおともおれを月れに座

畫讚

海老を有ふ佛に孫も月おれ

雨後

月さうさう水りぬの歌 水取  
異弁れさうさうおきり 月おれ  
さうさうさう月やねう根 水おれ上  
とるさうさうは 是かさうさう月れさう

宵くちりきりきりきりきり六月と夏  
ひやくちや月と多クあるおつるが  
白濁

ゆきおきや老れ病免子ノ出る月  
富山寺

まよふ寝ておれきり月夜くれ  
秋夜にほるる老人

目見やまきり老とせしや月夜入  
急行

月夜八門すておてもつらみ  
おとくり居色は獨居しや宵月夜  
松竹老きより青し月夜の豆  
秋の根ハ明ても志ハし月夜が  
十六夜いさよふつて居る月のよる口

十六夜や月よりの花の多  
井戸田

十六夜もさく月よる花所が  
ひきよひや花、紙燭して休の奥

八月より瓢合とよるうと

十六夜の闇のぬきとりの 瓢合

去宵雨 十六夜此宵ともてなす小雨の夜

彼岸 美寺の塘のうら 豆まき 彼岸が

芙蓉 月宵く芙蓉のうら 花の香

薄 陽空の秋もあつう 花をまき

唯多も断てて 舟の 舟まき

幡地の 風は 舟と 舟まき

芒より おてまは 舟の まき

舟雨の 里子 舟まき

都

法海の まき を 舟の 舟まき

旅人乃 水は 舟の まき

雨の やむ 夕陽 舟の まき

湖の水の 舟の まき 舟乃 花

小夜 舟の まき 舟の 東ハ 舟

夕月 舟の まき 舟の 舟

碇 稻花

下

友風亭

秋けりのあらしをて栞蔓  
とりのみの黄也なるや  
老母茶坊喜いとくうを  
解くまとうを交て野をの  
空也とてふことくう花瓶  
もほろろ砧の黄句せよや  
望まれすうや新秋雨  
水く雨降て夜の氣色

鶉鳴

初春

もいとよいワアアアアアアア  
萩とて文世とてきて 志きぬあ  
小ねきぬと月ね務も 志やねく  
小ねぬと伊勢も 志は夕可ね  
我多子志きぬて 志まる鶉くれ  
多ふれて又なり 鶉もかたりなり  
夕けや鶉のをれり 萩の志  
しき志や影もほろの志は志  
湖の音初アとてなり 志を



雁

三河乃必標堂と詠わは

小舟より棹さし中興河川

比下流よりあそぶ

まの層れおのり空甲の夕暮や

浮きれ下流よりと早こころ

下流や月影をさく地を流そ

かたしそや多て下流門田か

層より鳥のすゝる野田や

十々程萩吹きて下流より

あきばはるのつるもあそび下流の夕

雁並よりさねのむる川原が

子東り東武まゆく下

言流より小舟下流より

さるまゝ

下流より同り下流よりあそび

童謡

層より竿さかればあそびの下

先へかき見乃下あそび

下流より

謎にクられ半二つと半二  
うれ謎子あは色居さあふ

夕色

小島渡 山とこふ小島よーくうり音来

鹿 鹿老く妻切ーと鳴れあかん

イウをけもかーりは鹿のさ

有果てかろーくも鹿の鳴き

鹿鳴やふ山ウ葛家ニワ三ツ

羅城亭小集通題

鳴者をけよたとく人落月根

言関山お江ウ茶子

わさか

門をてり人もかー鹿乃多

秋葉山お藤和田の屋山

つゆをりあうて

鳴鹿ま多うゆき極え那

鹿の言や楮を月乃来ーて

朔風や鹿追うねし老れ多  
葵のやまきぬくよきも荒の声  
金華山と岐阜中納言の  
蝶阿やくくや突元くく  
鳥道始くく鬱くとく  
雀唄さう

りやとく路分き麻を岸に  
賀

秋千歳毛白き荒のあゆむ

稲刈 稲こくや刈や田まき夕煙  
峯山子 老の才の作りかすなりかす

鳴子 おもしあきくことかうてかす  
秋もくやあきくことかうてかす

瓢 引持て屋急よ舞ふなり子哉  
片麻若て久き始くくこれ

菊 唐黍 唐きひの垣ゆへ月如砌う南  
葉いつとふきく心定まり勢

亥中九日

旅人より一枝をよきよ葉の花  
ふき房乃ちてをり、英葉が  
却てするより老の色ぬ菊の花  
送る花の雨

月と葉竹の氣をさすゆる撫孫が  
贈花舟帰切々

父母とてをれりよ葉のて  
あつ葉竹山崎のわかれぬもよき  
訪葉房

いやはまー葉もつるぬ房乃春  
奥に朝人の隠者もきくのて  
世々るるれ園子一葉紙

花毎り葉もつるぬ房乃春  
葉の香や砂もつるぬ房乃春  
信ふや葉畑の屋より葉花  
花さ西の色つるぬ房乃春  
ゆり桶や葉は英菊を一花

香と——や菊より嵐の城の形  
菊の香や燈の光 牛乃夷  
さくこのや秋生——くさる豆のつる

蓬門

菊の名ら——忘きり菊の門

梅を人恋しくむくくく

牡丹ふふくく菊八人乃

深切は花多——

もろおこり菊や菴の菊と群

半閑舎を山を顔小あて  
水と脚を下踏てちつりの  
相問く玉をうくくゆあ  
月を松子不とあを落月ハ  
刈ててええまふんここの  
自然切のこもこもくく極  
かりたり

後月

半玉はおふゆあり後の月  
後の月次より人れ除き事

梅の如し四下三人十月見が

十三夜竹亭

後の夜を数やそくや月の宮

新のうけをや月十三夜

離山寺のふささ成る

別荘十入る

紅葉

紅葉して唐の柚味噌の匂い

降る赤きハ水子衣〜〜お茶や  
目暮りて五老峯子ゆられ

おれりやれとてか〜〜と

お茶を席上〜〜と敷し

たは新田川と紙子若て

ワ〜〜と許子〜〜と

似〜〜と〜〜と〜〜と

つき竹

一字り、紫白か〜〜と

平、齋の紅葉り〜〜と浪玉の

麦それ芦自傍秋田乃

儂ゆる蒔れをな〜りもや

山は詠よる落くくもぬ

海山丈もあ〜や〜りクもら

若らふ さ〜川や〜も〜も〜若紅葉

栂 赤栂のち〜れ〜ぬ朝り

菜萁 山 菜萁まつてあ〜る山智

初雪 初雪上松落〜店乃竹知

矢矧よこみ

尾花 夕ゆりや峰と屋衣の栂はあ

為教 淋〜も〜く〜てや水色の為教

郊外あき

芭ちふ〜こ〜ろ〜く〜夕〜

秋山 栂てえ〜き栂を〜れ〜

字活〜り〜ゆ〜し〜秋の山

秋水 翠鴨はも衣凍〜あ〜つ〜水

菖三末訪臨園通秋

秋夕 あよりのち〜れ〜の霞ひ〜

秋夕 和〜る山は〜も〜あ〜のれ

秋夕

よふ自う如やんしとまゝと秋の暮  
松舟やねしとまゝはあきの暮  
われくね旁りかうれん秋の暮  
かふるまゝいふ道なりりし秋の暮  
秋の暮の暮との暮の暮の暮  
もはくも水もあきまんやの暮  
芒やと勃くものなり秋の暮  
川風や物ももる秋の暮  
秋暮るる暮るる

秋夕

秋声

秋夕  
秋声

秋雨 位分と一里とよれ秋れ面  
ころもつ浦とて

秋の暮 秋れ面とらつと日入る  
巨河くも丸れしとやあきつ面  
あきさきねとまゝ秋ハあつるを  
秋れ夜やあきつと位面  
ゆをして人かゝるも次下の秋  
秋もや自りくもらハれ荒れい

悴如東野帯松

秋夕  
秋声



蜻蛉

蜻蛉も人の心と連てり  
とんぼもれ若くもとぬら  
蜻蛉のナラ斗つて枯枝を  
蜻蛉は水の中つておまふ  
実くつておまふ蜻蛉は秋も

紀風亭通歌

花を  
沸きさけ溜りておまふ  
とつておまふやおまふ  
枸杞は若乃こぼして若れや

り秋  
り秋はりておまふ  
り蜻蛉やとつておまふ  
秋も残赤き秋やとつて西は

冬之部

初時

まつしんれ跡ちり雪の音ふり

かきとく冬ふ来よりり初時

鳴海してしんれ初より草鞋の音

我たれむ冬ふ始りて冬初時

しんれや日小車けし花乃上

一雪ふ初れしんれ初時

時雨

竹葉歌

さし竹ふりてしんれ初時

竹葉歌

竹葉歌

新屋やを人々やうけし夜明け  
山茶花の香をうけしれ 竹あり  
竹あり 水れ竹あり 丁那  
又君とや 何とちうしりし色  
芭蕉忌

世にゆきをまよふは竹の影  
大くしれ竹を竹あり 月影あり  
まよふ竹ありけりあり 竹あり  
しり色てまよふ竹あり 竹あり

り運みふふとのりりしり色うそ

柳亭

浅き月とたかきまきうけつ竹あり

茶室近法

空ありしり色うけ竹あり竹あり  
夜しり色うけ竹あり竹あり

逢百非至民帰真州

竹ありまよふ竹ありしり色  
くれまよふ竹ありしり色 詠乃

冬々々々々名も知らんと風知して  
しられく帰る中へ百非天威の  
別とを思ふ中へ百兆のワ  
反業展つ子しまつりてはさるふ  
ありれは名知とて

冬々も春ふ阿をこもして詠れ空  
白居老人と憐む

冬のくはみよ位ふふくはれは  
まろりともふは白れ新 位は

く色や杉や柏も 視乃も  
夜く色はよく物さうの嵐ふ

萱草の玉位まき阿の野

冬風雜ととらん時向れ神隠山  
夕くれもや山家比小石屋  
雪野うや一を鏡れ空を  
相位き里やく水乃後河也

玉笠里

霜

雪の玉——ま食麻乃是れ吹

五七五

表河の店を閉りて

是よりや、予の田舎を去るの定  
世の兩卷二集令れ、東に宿  
几堂とて、命終れり  
若事——り、無きは、  
い、ち、ふ、く、は、白、く、く、の  
相好集、念、進、著、好、俳、句、也  
予、の、予、は、好、く、都、に、あり  
か、く、方、遠、く、て、き、き、り、し、と

歎くや

あまて、神、人、と、て、お、れ、は、  
離々の

まて——り、き、海、を、と、お、の、草、木、が  
精、石、乃、と、心、と、種、と、り、関、小  
中

き——り、七、時、た、も、お、東、好、山、也、が  
思、ふ、意

利、刀、子、さ、り、り、く、く、り、予、お、れ、

木枯

木~~~~~やけさハあえつた池の鴨  
風や海~~~~~出日月  
木~~~~~れ吹や竹木もさびた  
木枯れ吹止 鳴まや~~~~~

小衛室

~~~~~や枯れさうまう~~~~~そのれ密  
木枯れや~~~~~はあれも

梅向より二句

~~~~~と白木~~~~~れ苔の上

為系

あ~~~~~や~~~~~なげれ~~~~~  
~~~~~さん才とあ~~~~~れ~~~~~  
~~~~~新れ杉風松~~~~~  
~~~~~の木~~~~~さ~~~~~の~~~~~

内侍~~~~~

~~~~~杉一色れあ~~~~~  
~~~~~や~~~~~下~~~~~上  
不枯れ園~~~~~

~~~~~け~~~~~臭~~~~~

木仏の美と踏か—う—高馬橋  
大和のぬをり所—  
畝火の山をいつに耳々山ハ  
とまきやあらぬあうく水  
乃あう—  
うと呼—  
りのすえんのう—  
印—  
うもは

下  
城  
カ

以人も耳り—山—高馬橋  
系高以下流ゆき—  
まう—  
ワも—  
野の中—  
おら—  
逢坂や山—  
梅葉—  
あ—

下  
城  
カ

柳栢  
栢

くゞ道の祇園くまの木の  
清たきや木のまゝ吹雪く  
空くくく候わの柳くまの  
むつくくく候や栢花のむつく

訪聖崔

栢くや地をくまのむつく

詩仙堂得路

丈山のまゝくく栢花く  
くつれりく入ぬく水溜り

栢尾花

く水溜りく河原山子く  
まゝくくくくくく栢尾花

蘭屋くくく

尾花くくく鐘くくく乃宮

大魚退悼

泣く父くくくく栢尾花

集和部波くくく

くくくくくく三人四人

枇杷園くくくくく

栢尾花



三十

ゆふふとくとうかりーき文  
かりとは自ふとらりる舞ふ  
ふーワんけーワんけふ  
前根けとワカとんと葉を  
酒新ふ折すゆきま書  
ーくこととてなーこ  
鼻 び身ゆーーてあーり  
らつふんやー  
前根け葉や尾花と前かー

冬枯

冬ふれの比ふやうきとこれ

冬ふり色や板戸とては朝日根

冬枯や柳とては雪より色まら

葉花

葉の葉ふりけしき、あつて葉

葉の花の根とて三月乃自い

帰花

帰花一たりらてあつてきりり

枯草

枯草とらうとりのあら草は枯草や

大根引

大根引文山とてはしきや大根引

待雪

待雪もつち候まちてやまきさ庭のね

三十

初雪

雪やまへん三月月まゐり山の上

もつ雪や人いふまゝの松 白

松は焼土と見ゆらん竹も

人く乃家病をいふく三

一ももたゝま石をいふも

松の葉をひくく霜も

まつ雪乃却えしむ板戸

初雪よ香れまゐりの馬

真似渡海 松をいふ月れしりなり 真似渡海

寒さ

人言は跡より色なりさむく

雪をいふまゝの時ぬりし

足腰のくくまゝなりさむさくな

葉名渡河

舟庭く月れさくもささ

衰傷

星のちりうりなり夜半の

細代

雪はまゝあり細代まゝ

細代守女を山乃六

三河にて

千鳥

昔何處千鳥袖のまきよ鳴千鳥  
二おや千鳥まき之々山乃まれ  
初衣さの子をまらぬわつらほが  
月代や千鳥枯るれ破まりり  
をりやハ寛とつよ千鳥が  
柿ちや最のしらもろく子を  
千鳥泣ありそ中よ吾れれ泣  
おろけ物つけや人も葉紙ハを障

水鳥

鴨

五道亭

水鳥やとましく動く人れ新  
水鳥れつれ千鳥るる浮草が  
廣津やあ日鴨なく星のくけ  
能く鴨れ多けち枯立草とせと  
家橋やあきて鴨の多鴨の多  
木曾川にて  
鴨水谷子舟系くけ早瀬が  
炭薪主人二瓢とちも火

おもしろき袖子して赤式子  
俱しひしつらむるの壁上は  
愈て空房をまきしむ  
きあや主人陽て未く  
まらぬ瓢をともさるる

花を鴨の多印く和く瓢  
大徳子

生海氣

湖と鴨と理るる在明う押  
空切てくきとも鳴くぬ生海氣が

船 炭

さりし生海氣しも物のこころが  
船舟やけしつらむる枝の雲  
炭言の事を老ういぬる炭  
岸のまき字法は炭舟より  
夕々しや炭の海しつらむる門の茶

衾

伊賀伊勢の善烟を結いぬる炭  
字も白法縹よりぬき白髪が  
毎子言あり衾子さるる終夜  
方とけくむるしや衾のあし

紙子 古里さくくぬくつなり古紙子  
冬もり鳥も倉ハぬいのらくれ

冬冬 大黒此竹ともやいり

萩子こころもねもあり冬籠

冬木立 こころもき一葉二葉や冬木立

冬木立ち 哉のち山ちくぬも

芭蕉公 百回忌千句

芭蕉

ちかこころもそのま量なり冬木立

雪

市川 白梅よりぬくと春撮

よりさくはくく

白梅死して冬木立とも成り

知多子 屠も色く紙市も春撮し

土着より雪のま山とてさかり

西宮 十二月朔り 茶 一白

一白井

うを雪や雪まぬくのまの文

水まをし雪とを入屠乃物

高といふの中は橋ありと船の音  
 月をた夜とありと風情が  
 暁やありと雪子垣も  
 月々雪うたれくくく休の影  
 降ちぬあやふく日あり  
 美雪居れ名をま体雪の  
 夕きをりふま三井  
 寺の雪おて湖上書  
 千いんきや

朝のゆき雪も雪のつらり  
 雪もくちり雪の音の降しとあり  
 一白井桂裏追峰  
 降ちぬくく物のご縁が  
 雪もくちり鳥に雪を降ちぬ  
 夕々れの雪もぬ里や雪声  
 月音やこいぬ月を雪の  
 志くくくくくく人音は  
 降雪の三井寺とあり

曉史こやこやあて伏しゆて  
まて徳ふ

雪と雲と植て松のふちまきりうれ  
一勾井雪見

人のまじこいこい乃雪も初めけ  
雪見の春縁結強て成り市利  
日の足る方り西なり雪の原  
さつりても雪を降わり雪山家  
中ま掃や家あそきて雪を

面白のうき世や雪の馬車  
夜角の山買まかん店のを

守中風

霞

玉霞まて考妙なり細ユ、却  
うううう年の在ぬる雲か

氷柱

りれ新やおねうは玉のさ

勝山を舟なりトマは夜舟

川まじりてりそ見たり風

あうく雪ま降りてまは

けい元と假名

あつははれけははわのや  
薄氷もりや山柳の花の若  
唐のあハ皆伊勢人よを至極

葱

小式部とすくはるも三久根原細

木兎

木兎や回一うゆそむす日

忘

鱒

鱒柄や禿くす身浅芽生ふ  
売堀も音とや鳴らん草の雨

老月

うくまても写さかうりを以一月

まらくと昔もむきの月夜が

やくと定丸く家より冬乃月

冬の月あまのれとくわ人もくは

玉帯く書林と訪くぬ夜ハ

月れ雲ふき晴く一雲一

まきしもまらきこわい

たふれてそくひふたをる草乃

けいをりあゆりてその雲の



池形工室とく先より

初ふよしゆり色その月夜ど  
 まぬく〜降ゆ〜古や冬折月  
 抱き袖留まの煙や通〜人  
 月さして志望此陰きく火桶が  
 行な〜や梅は火桶のあ〜まり  
 まで果〜えれり幸もこた〜り  
 なく答〜て寐きは深の浮世が  
 ぐ〜い〜ま〜てはあ〜を〜言〜し〜程  
 火桶  
 河豚  
 冬

冬日

冬のゆや菰若てま火影法師

馬上吟

冬のゆは程〜く〜や石部山  
 冬の夜や徳〜又〜ゆ〜仲の多  
 冬は夜ら〜き〜背〜ろきお家が  
 冬雲 梅妻のめろ〜ういぬ冬のそ  
 冬雨 水音の鳴り〜ま〜ゆ〜ゆ〜ゆ  
 秋聲は〜初子柿と〜ま〜あ〜ゆ〜あ〜せよ  
 寒月 雪〜り〜ふ〜り〜ま〜ま〜雪のち〜り〜り

足袋  
神叩

山甲もあはれもなき身はねが  
お火焚うけは足袋きけ女、礼  
南無も月夜南無も何のあはれ叩  
あはれなきい無意の友とてらたき  
か辰川や西のきこもる神叩  
あはれけや又もりなきあはれなき  
涙はかゝりてりぬきあはれなき  
神たなきちうきこもるあはれなきや  
まゝ神や聖のうつに鳴くくま

野秀亭

すゝもきや始りなきの露のうけ  
まゝもきと見え

ゆき  
年忌  
早秋  
蓮京  
り年  
も是より是くももる眼の泪が  
吸さくもやあはれもあはれの松  
月高や人をももるこれいれ  
あはれもあはれもあはれもあはれの松  
裏白もあはれもあはれもあはれの松  
あはれもあはれもあはれもあはれの松

年暮

り年此こそしつともせぬ山家が  
蜂も乃こころをまじりてまじり

年とともや小春より

まじり日・市上よまじりてまじり城

成見ふ

空しくはぬねむる角力の所まじり

換くとくれよるこころも一かこ

花月一護のあまのまじり

おもも既よりまじり

もや一瓢の物の珍も

采々

瓢箪丁録抄より年々

年暮夫こころをまじりて

松

雜之部

月花を於ていふは 喜以多

歎多松亭松

月言よりいふは 八勢一木の節

又黒髪

花を實と四竹をいふは 子と茶

をいふは 竹の如く こそ竹の林に

むとやいふは 竹をいふは 竹

石河大文六十頌

竹

新

大いふ隈身をきけぬのよらひいれ

を龜つゝ其手やつゝおれ知れど

山崎お映山亭にて

臨

いもりたゞ空々路やぐ燈ろ布

倉海

富士

今日もいふやあまはしるる石二乃山

九月十九日 逢はく有玉也

つゝあま

月ともの間ふけりる石二乃山

各歌

懐古

懐哉やわづら止るる目の口

芳光の馮月、四十の契よ

よゝ山あまきハ人の初き

士朗田又の名名梅花園  
つとぬぬあしこし  
いさらちあしこし  
申のふらあしこし  
あしこしあしこし  
あしこしあしこし

歩古きるるあしし  
心せしむるあしし  
折るるあしし  
中子十の折るるあしし  
をむるるあしし

ひしむるるあしし  
回しむるるあしし  
申す類ひあしし

乙酉秋

朱國之雅

文政八年乙酉秋發行

梅花園藏板

晴風園  
藏

249 5000



愛 知 県



1103284289

